

僕は奇跡を信じない

二色

## 僕は奇跡を信じない

---

『僕は奇跡を信じない』

作 二色

僕は奇跡、という言葉が嫌いだ。そんなものどこにもありはしないからだ。例えば大きなプラスになる出来事が起きたり、大きなマイナスがプラスマイナスゼロになったりしたとき、自分一人じゃ受けきれない幸福を言葉にして、神様だとか知り合いだとかに言うための言葉だ。1%でも、もっと下の確率でもいいが、とにかく何かが起こる可能性があって、それが0%でなければ（そもそもそんなものは多くないのだが）、何がどう起こっても全く不思議ではない。よって、奇跡なんてものは存在しない。

だから僕が普通の高校生活を送っていて、好きな人が出来て、恋人になって、一緒に過ごして、その人をもっともっと愛するようになっていって、そしてある日その人が交通事故にあって、一命を取り留めても奇跡じゃない。出会えた奇跡なんてものはないし、最初から事故に遭わない方がいいに決まってる。彼女が生きていたのは偶然だ。なので僕は「奇跡的に生きています。ですが、彼女が歩けるようになるにはもう一度奇跡が起きないとはいけません」と医者が出たときに、思いっきりその医者の顔面を殴った。生まれて初めて人に暴力をふるった。嫌いな言葉を二回も使ったことにも、本来そういう事を言わないために存在している職業の人物がそれを言ったことにも、両方に腹が立って仕方がなかったからだ。

彼女、藤田未来（ふじたみらい）が意識を取り戻して暫く経ったとき、車椅子に乗った僕の恋人は、見舞いに来た僕に泣きながらごめんなさい、と言った。彼女は引込み思案で、気弱で、自信が無くて、成績だけはよかったけど、運動はまるでできなくて。そんな彼女が、今、僕の前で泣いている。

「私はもう、歩けないと思う。私がいると、貴方にまで迷惑がかかる」

だから、別れよう。彼女の初めてのわがままを聞かされた時、僕は自分があまりショックを受けていない事に我ながら驚いた。人間は、希望があるから絶望する。少しでも可能性があれば、それに賭けてしまう。それなら、最初から希望なんていらぬ。可能性なんて捨ててしまえばいい。僕はそう考えた。それ以来僕は、喜ぶこと、怒ること、悲しむこと、楽しむことを忘れた。心の深くのタンスに乱暴につめこんで、そこに鍵をかけた。もう、そんなもの感じたくないからだ。

次の日。僕が学校に行くと、彼女は既に障害者の為の学校に転校していた。クラスメートの哀れみの視線が鬱陶しかった。担任の教師の人生の先輩としてのアドバイス、という名のもとに行われる自己満足の為の説教にも、両親のわざとらしい気遣いにも、もう全てに嫌気がさした。そしてなにより、そんな思いを隠し通して、元気に振舞う自分が許せなかった。いつも笑顔を貼り付けている己に吐き気がした。

何もしないでいると気が狂いそうになったので、僕は勉強に没頭した。なんでもよかった。ゲ

ームでもギャンブルでも酒でもタバコでも薬でも。たまたまそこに参考書があって、時間対資金のコストパフォーマンスがいい上に周りからも褒められる、と、それだけの理由で選んだ。元々勉強は好きではなかった。未来に勉強を教えてもらうことはもうないから、一人で問題を繰り返し解くことに慣れるまでは少し辛かったが、それができるようになると、みるみるうちに時間は潰れていった。

そうやって、気づけば僕は大学生になっていた。学部もどうでもよかった。一番難しいのが国立の医学部だったから、せっかくなのでそこに入ってみただけだった。お金のことなら心配するな、と言った両親の目は、期待と希望に満ちていた。僕の未来を考えているのかもしれない。あるいは世間体かもしれない。どうでもいい。

僕が受かった途端、周りがちやほやするのが煩わしかった。放っておいて欲しかったのに、結局、僕の周りには人が集まってしまった。もっとも、そんなものは進学したら収まっていったが。

医学部での生活は今まで人生の中で一番に忙しかったが、それが余計なことを考えずに済む事に繋がったから助かった。自分の顔に着けた笑顔という仮面は剥がれることがなく、結局、僕はまた周りに人が集まるようになってしまった。あの日以来本当に笑ったことなんて、一日たりともなかった。大学に受かったときも、別に嬉しくともなんともなかった。単に僕が周りの連中より勉強しただけだ。ともかく、どんな要因があったにしろ結果は結果でしかない。僕はそうやって日々を過ごしてきた。それに不満はなかったが、逆に喜びもなかった。いや、果たして、喜びなんてものは本当にあるのだろうか、とまで考えた。だが、それも一瞬だった。あるかないか分からないものを議題に論議するのは文学部の哲学科に任せればいいものであって、医学部に籍を置く僕には関係ない話だ、と気づくまでにそう時間はかからなかった。僕は忙しい毎日を過ごしていればいい。何も考えなくて済む上に周りの評価も上がる。悪いことなど一つも無い。僕は六年間を大きな出来事もなく無難に過ごし、国試に受かり、医者になった。

医者になるにあたって、専攻を決める必要があった。なんとなく、神経系の専門医になることにした。理由などなかった。気が向いたからそうしただけだ。なったのはいいが、医者のヒエラルキーというのは非常に面倒くさいもので、教授や副教授のご機嫌をとり、顔色をうかがう毎日だった。それでよかった。そうしないと、自分の研究もロクにできない。僕は僕自身に嘘をつくのにはもう慣れていたので、苦痛はなかった。そうして、僕は外科医として働くことになった。色んな手術をしてきた。多くの患者に感謝され、少しの患者に呪われる。そんな日々を過ごした。

いつしか僕は二十も後半になっていた。そこそこの地位とまとまったお金を手に入れた。だけど、それにもやはり意味は無かった。地位を振りかざしても意味はないし、金があっても使う時間も用途も無い。夜、疲れ果てて病院から帰ると、ダイレクトメールの中に一通のハガキがあった。高校の同窓会の誘いだった。たまたま記述されている日時は空いていたので向かってみた。暇つぶしくらいにはなるだろう、と、そう思いながら。

約十年ぶりのクラスメート達は様々な人生を送っているらしい。父親になったもの、母親になったもの、夢を追いかけるもの、現実と戦うもの。僕はそのどれでもなかった。医者になるなんて凄いい、勉強、頑張ってたもんね、と男女問わず口をそろえて言われたが、僕にとってはどうでもいいことだった。医者の何が凄いのだろう。職業に貴賤はないはずじゃないのか。僕は別に威張るために医者になったわけではないのに、何故。

そしてやはり、未来は同窓会に来なかった。別にどうということもない。心のどこかで、来るはずがないと思っていた。

時間はどうやっても過ぎていく。安定した地位を手に入れた僕は、ある程度の自由になる時間を手に入れた。いや、手に入れてしまった。その時間をどうやって潰すかが問題だった。僕に興味はない。遠い昔、未来と一緒になら、何をしても楽しかったのに、と自嘲気味に小さく笑った。

女性と付き合うこともあったが、長続きしなかった。「貴方が好きなのは私じゃない。あなたは私を見ていない」と別れた女全員に言われた。なら、誰が好きなんだろう。僕は誰を見ているんだろう。不思議でしょうがなかった。そんな相手、いないというのに。

空虚。虚空。無。僕の中身は空だった。肉体は器でしかなく、そこに何も入っていなければそれは人間と呼べるのだろうか。僕はそう考え、数秒後にやはりそれは哲学者に任せることにした。僕は、僕にできる、僕にしかできないことをやる。考えるのは、それからでいい。

時間を潰すために文庫本を買いに街中を歩いていると、僕と同じくらいの歳に見える親が子供を連れて歩いていた。とても幸せそうに、笑顔を振りまきながら。

ああ、そういう生き方もあるんだな、と、刹那、思った。

僕の家はマンションの二階にある。そこそこ住み心地がいいが、オートロックはついていないし、エレベーターもない少し古いマンションだ。収入のおかげで一人暮らしには少々広い家に住んでいるが、だからといってなんだというのだろうか。家に一人きりではかえって虚しいだけだ。だが、引っ越すのも面倒だからそのままにしてある。

ある日の夕方のこと。僕が今流行っているらしい、恋だの愛だのを偉そうに語っている小説を読んで時間を潰していると、階段の方面から大きな音がした。まるで、思いっきり転んだかのような音だった。最初は間抜けな誰かが転んだだけだと思っていたが、その音が何度も何度も繰り返すので、うるさくて部屋の外に出てみた。階段を見ると、壁に寄りかかり、手すりや杖で体を支えながら階段をゆっくりと上っている女性がいた。老人、というわけではなさそうだった。髪は綺麗な黒髪だったし、背丈も小さくない。

そして、どこか放っておけなかった。

「手を貸しましょうか？」

僕の口はそう動いていた。普段の僕だったら確実に無視していたのに、何故だろう。

僕の声に女性が顔を上げる。その顔は、少し歳をとってしまっただけの、見間違えよう

のないものだった。

「……未来」

僕はそれしか言えなかった。

おかしかった。夢でも見ているのかと思った。彼女がここにいるはずはない。階段を登れるはずはない。運良く歩くことはできても、段差を登る、なんてできっこないはずなのに。

僕が固まっていると、未来は言った。昔みたいに、無邪気に、優しい声で。

「えへへ。見て。私、また歩けるようになったんだよ」

彼女は笑顔だった。額から汗を流して、辛そうな声を出して。それでも、笑顔だった。杖と手すりを使って、何十キロもの荷物を背負ったかのように階段を一段一段とゆっくりと上り、その度に苦痛に顔を歪める。そして、すぐ笑顔になる。見ていられなかった。

「未来、僕が支えるから」

「そこで待ってて！」

全て言い終わる前に、彼女は僕の言葉を大声で遮った。昔の未来だったらそんなこと考えられなかった。彼女は引っ込み思案で、気弱で、自信がなくて、成績だけはよかったけど、運動はまるでできなくて。そんな彼女が、今、僕の前にいる。そこでようやく気がついた。彼女は強くなったのだ。とても。あの事故の日から歩みを止めた僕とは違って、僕が逃げるのとは反対に、彼女は戦っていたのだ。ずっとずっと。そして、未来はたどり着いたのだ。僕のずっと先に。手が届かないほどに。助ける必要がないほどに。

「私が一人で行かないと、意味、ないから」

彼女がどれだけ辛いらハビリをしたのか、逃げただした僕には分からない。だけど、それが並大抵のものでないことぐらいは医師のはしくれとして分かる。彼女は歩けるようになった。そして今、階段すらも上れるようになっている。どうして。どうしてそんなに未来は強くなれたのたのだろう。

「頑張れ！ 未来、頑張れ！」

思わず僕は叫んでいた。頑張っている人間に頑張れと言っても仕方がないのに、僕はそう言っていた。視界が歪む。僕の目からは涙が溢れていた。もう十年近く、いや、それ以上忘れていた感情が、体の中から湧き上がる。

彼女は僕の言葉を聴くとにっこりと頷いた。

「待ってて。もうすぐそこに行くから」

違うんだ。行くのは僕の方なんだ。彼女が僕に近づくんじゃない。僕が彼女に近づかなければいけないんだ。本当は、そうなんだ。

一步。また一步。彼女との距離が近くなる。あの日から今日までの時間を反芻するかのよう、ゆっくりと、でも、確実に。

そして彼女は階段を上がり、おぼつかない足取りで僕の元へとたどり着いた。

「やった。ゴールできた」

彼女が息を切らしながら、小さくそう言った。

ふらふらになった未来を僕は抱きしめる。涙が溢れて止まらなかった。辛かった。苦しかった

。

僕は本当は絶望などしていなかった。

医師を殴ったのは許せなかったから。勉強を必死にしたのは医者になりたかったから。感情を忘れようとしたのはそうしないと押しつぶされるから。神経の専門医になったのは、もしかしたら未来を救えるかもしれなかったから。媚を売ってまで研究をしたのは、少しでもその確率を上げたかったから。同窓会に行ったのは、未来に会いたかったから。子供連れの夫婦が眩しかったのは、心のどこかで自分を重ねていたから。

ずっと未来が好きだった。今までの僕の全ての行動は、未来のためだった。僕は僕を否定することで自分を保っていた。僕が走っていたのは前へ進むためじゃなく、逃げるためだった。現実という、あまりにも残酷で、不条理なものから。

「未来、未来い……」

僕の体から力が抜け、通路に膝をつく。泣きじゃくる僕の頭を、彼女は撫でてくれた。優しく、まるで子供をあやす母親のように。

おかしかった。本当は僕がそうしなければならないのに。

「強がりなの、変わってないんだね」

未来は微笑みながらそう言った。

彼女はさっきゴール、と言った。それは違う。ここがスタートなんだ。これから、もっともっと辛いことが起こるだろう。もう、逃げることはできない。でも、それでいい。僕達は、二人で歩くのだから。お互いを励まして、足を棒のようにして、それでも前へ進むしかないのだから。

彼女の足が動くようになったのは確率が0%でなかったから。彼女が階段をのぼれるようになったのは、血のにじむ努力の結果だから。僕が笑えるようになったのは未来がいたから。僕達がお互いを今まで想っていたのは他に相手がいなかったから。全て、全て確率と努力の結果。奇跡なんて何処にも無い。いや、僕には……違う、僕達には、奇跡なんてものは必要ないのだ。そんなものはなくても、人は頑張れるのだから。だから。

——だから僕は、奇跡を信じない。

(了)